Case study

実践事例1

東京都・私立品川女子学院中等部・高等部

28歳の自分を思い描き、その実現に向けて必要なことを見つけ、行動する力を育む

「社会で活躍する女性の育成」をミッションに掲げる東京都・私立品川女子学院中等部・高等部では、自分の人生を能動的に築いていける力の育成を目指して、2003年度から「28project」を推進している。社会とのかかわり、他者との協働、他者評価・自己評価などを重視する探究学習を中心に据えたその取り組みを見ていく。

人生のターニングポイントで能動的に進める力を育む

東京都品川区に位置する私立品川女子学院中等部・高等部は、完全中高一貫教育を行う女子校だ。漆紫穂子（うるしほこ）理事長が教諭・校長時代から学校改革に取り組み、進学実績を上げてきた。

進学指導に力を入れる中、学力が伸びる生徒は、目的意識を明確に持ち、学習への動機づけを自らできていることに着目し、目的意識を持たせるための活動を取り入れてきた。その推進の過程で、同校の教育活動の軸となったのが、28歳の時に社会で活躍する自分の姿をイメージし、そこから逆算して必要な資質・能力を身につけることを目的とした「28project」だ。神谷（かみたに）岳副教頭は、28歳をゴールとした理由をこう語る。

「大学卒業後に就職した場合、28歳は社会人5～6年目にあたります。仕事を一通り覚え、自分は社会にどのような貢献ができるのかを考え始める時期でしょう。そして、私生活では、結婚や出産を考えるようになる時期でもあります。そうした人生のターニングポイントにおいて、自分で目標を見いだし、その達成に向けて行動する力や、前向きに自分自身を動機づけする力を育むことを目指しています」

「28project」は、2003年度に、既存の教育活動を整理してスタートし、様々な試行錯誤を経て、現在の形に至った。その過程においてプロジェクトの趣旨が教師間で共有され、今では、どの教師も28歳の生徒の姿を念頭に置いて、生徒と接している。進路進学指導部長の斉藤浩司先生は、次のように説明する。

「生徒には、『高校卒業後10年の節目にもなる28歳の自分の姿を思い描いていこう』と、授業やホームルーム活動、学校行事など、様々な場面で伝えています。『28project』が本校の教育活動の中心であることは、生徒も自覚しており、28歳を1つのマイルストーンとして、自分はどうありたいのかを考え続けます」

動機づけにも通じるデザイン思考を学ぶ

「28project」の特徴は、社会と直接かかわりながら、チームで協働して取り組む数々の探究学習にある（**図1**）。同校では、14年度、SGH（＊1）の指定を受けたことを機に、生徒への育成を目指す資質・能力を「問題発見力」「共感力」「発信力」「内省力」「英語プレゼン力」「英語コミュニケーション力」の6つに設定。多くの体験を通して失敗と成功を繰り返しながら、挑戦する姿勢を持ち、他者と協働して物事を成し遂げる力を育むというねらいの下、地域や企業、大学と連携していた従来の活動

＊1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

を見直し、中高6年間にわたる探究学習のカリキュラムを構築した。

探究学習の教育的効果をより高めるために取り入れたのが、「デザイン思考」の学習だ。それは、日常生活の中からユーザーのニーズや課題を発見し、事業・サービスのコンセプトを練り上げ、試作し、新たな価値を生み出すという手法で、企業では新商品の開発などに活用されている。その手法が、探究学習における問題発見の過程だけでなく、生徒自らが人生における動機づけをすることにも生かせると考えた。

「『デザイン思考』では、テーマとする対象をインサイト（洞察）するとともに、自分の関心・意欲の中から問題意識を掘り起こしていきます。その手法は、人生において自分が進む道を見いだす過程と重なると考えました。探究学習でも人生でも、『それはおかしい』『これを何とかよくしたい』といった思いを大事にしてほしいと考え、1年次から段階を追って『デザイン思考』を学べるようにしました」（神谷副教頭）

外部と連携した活動では、外部講師の話を聴くだけでなく、外部講師と生徒が対話し、協働作業をする場を必ず設けている。

「保護者でも教師でもない大人とじっくり意見を交わし、時には同じ人と何度も対話する中で、仕事や人生への向き合い方など、深い話を聴くことができるでしょう。また、その人の姿勢から生徒自身が感じるものもあるはずです。そうした経験を積み重ねる中で、自分はどう仕事に向き合っていくのか、大人になったらどうありたいのかを内省することを期待しています」（神谷副教頭）

副教頭、1学年主任
神谷 岳
かみたに・たけし
教職歴28年。同校に赴任して29年目。道徳・総合検討委員会。

進路進学指導部長
斉藤浩司
さいとう・こうじ
教職歴19年。同校に赴任して20年目。

CBL担当
丸山智子
まるやま・ともこ
教職歴8年。同校に赴任して4年目。家庭科担当。

東京都・私立品川女子学院中等部・高等部

◎校是「自ら考え、自らを表現し、自らを律する」の下、「社会で活躍する女性の育成」を目指した教育活動を行う。2004年度から中高完全一貫教育校に移行。14年度から5年間、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」指定校。

◎設立　1925（大正14）年

◎形態　全日制／普通科／女子校

◎生徒数　1学年約200人

◎2019年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、筑波大、千葉大、お茶の水女子大、東京農工大、横浜国立大、首都大学東京などに15人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ714人が合格。

◎URL　https://www.shinagawajoshigakuin.jp

図1　「28project」における主な取り組み

プログラム名	実施学年	内容
デザイン思考の育成	1年次から順次	デザイン思考は、新たな価値や商品を生み出すための手法の1つ。日常生活の中からユーザーのニーズや課題を発見し、事業・サービスのコンセプトを練り上げ、アイデアを形にして提案する。1年次からその基礎を学び、体験学習などで実践。理論と実践を繰り返して、徐々にその思考を身につけていく。
企業コラボレーション総合学習	3年次	毎年1～2社の企業の協力を得て実施。生徒と社員が共同して、新しい商品やサービスを開発する。個人で考えた後、グループで議論して原案を作成。クラス内で社員も含めて評価し合い、選出されたクラス代表が学年で発表し、最優秀作を決める。企業に認められれば、実用化もされる。
起業体験プログラム	4・5年次	クラス単位で株式会社を設立し、文化祭に出す店を、企業経営と同じように運営する。企業理念の設定に始まり、代表取締役、会計、広報などの役割を決め、事業計画を立てて準備。文化祭当日の販売を経て、決算をし、株主総会を開催して会社を解散させる。
家庭科でのCBL（＊2）	5年次	4～5人から成るチームごとに、身の回りの生活での問題や疑問から課題を設定し、解決策をまとめて提案。クラス発表、学年発表を経て選ばれた代表チームが、オーストラリア研修に派遣され、現地の高校生に英語でプレゼンテーションを行う。

＊学校資料を基に編集部で作成。

1年次からの積み重ねで自律した活動ができるように

「28project」の主な内容を具体的に見ていく。

1～3年次は、「地域・日本・世界を知る」を切り口にした体験学習で、デザイン思考を実践し、視野を広げるとともに、チーム活動の基礎を学ぶ。そして、3年次の「企業コラボレーション総合学習」では、企業と共同で新しい商品やサービスの開発に挑戦する。そうした経験を積み重ねた上で、4・5年次は「起業体験プログラム」、5年次は家庭科でCBL（＊2）に取り組む。

「起業体験プログラム」は、クラス単位で株式会社を設立し、文化

＊プロフィールは2020年3月時点のものです。
＊2　Challenge Based Learning の略。問題解決型学習の1つの方法。解決策を立案するだけでなく、その実践までを行うプロジェクト型学習。

祭に出店する模擬店を経営する活動だ。代表取締役の選出、会計や広報などの担当決めを行い、企業理念を設定して、事業計画を作成する。出資を募るプレゼンテーションを経て、具体的な準備に入る。9月の文化祭に向けて、4月から「総合的な学習の時間」やホームルーム、夏季休業などを利用して準備を進める。

「商品や食品の単なる販売とせず、それらを売る理念づくりから企業を持続させる利益の出し方までを経験させようと考え、本プログラムを始めました。そのため、企業の方には、具体的な商品知識だけでなく、企業理念などをしっかり語っていただくようにしています」（斉藤先生）

家庭科で実施するCBLでは、生徒が4～5人のチームとなり、身の回りの問題や疑問から課題を設定し、解決策を考えて実行し、その内容を発表する（**写真1**）。19年度は、例えば、自分の生理痛を父親に理解してもらえなかった経験から、男性の生理痛への理解を促す活動を提案したチームが、生理に関するウェブサイトを開設。生理に関する映画の上映会も企画した。家庭科担当の丸山智子先生は、CBLの意義をこう語る。

写真1　CBLの学年代表チームの発表は、聴衆からの質問に答えながら進める対話形式とした。聴衆の生徒も、発表者に質問するなど、能動的な姿勢で参加していた。

「大学入試では課されない家庭科だからこそ、受験の先を見据え、社会の問題に目を向けられるような学習内容にしています。生徒は4年次までに探究学習を繰り返し経験しているので、自分たちで話し合って、調査計画を立て、問題解決に役立ちそうな企業や団体などを探し出し、協力を依頼するというように、自立して活動を進めていきます」

対話を通じて他者を理解・尊重し、内省につなげる

同校が行う探究学習には、2つのポイントがある。1つめは、チーム間の競争だ。1年次から多くの活動をチームで行い、その成果は教師や外部講師に評価され、順位がつけられる。例えば、CBLでは、クラス代表による学年発表を行い、学年代表に選ばれたチームは、オーストラリア研修に派遣され、現地の高校生に英語でプレゼンテーションする。

「評価の際には、評価基準を明示し、評価の過程もオープンにして、生徒に不満が残らないようにしています。順位をつけることで競争意識が生まれ、よりよいものをつくろうと、生徒は一生懸命取り組みます。その結果、全体的にも高いレベルの成果が得られます」（神谷副教頭）

2つめは、相互評価と自己評価の場を設けることだ。まず、発表時には、評価シートを用いて他チームの発表を評価する。活動終了時には、チーム内で相互評価をし、相手に伝え合う場を設けている（**写真2**）。そうした過程があるからこそ、生徒は、評価の順位も納得することができる。そして、個々の特徴やよさを認め合い、相手を尊重することで、自分も頑張ろうと意欲を高めていく。

「多くの生徒が自分の意見をはっきり言うので、意見がぶつかることもありますが、もめごとが起きても自分たちの力で解決します。1年次から様々な生徒との協働を通して、互いが納得する答えを出す方法を体得していくからでしょう」（丸山先生）

自己評価では、チームでの役割や貢献度、活動を通した自身の変化、チームに不足していたものとその解決方法などを言語化する（**図2**）。

「活動の度に自己評価を行うことで、チームや自分の問題とそれに対してとったアクションを内省し、次の学びに生かそうとする姿勢が身についていきます。他者との協働や自己の内省があるからこそ、他者のことまでもよく考えて、自分の生き方を選べる人になれるのだと思います」（丸山先生）

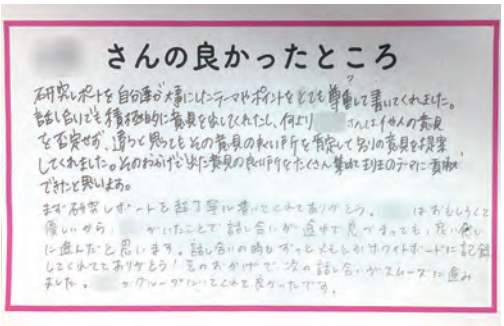


写真2　相互評価シートを活用し、生徒が互いによい点を伝え合うことで、一人ひとりの特徴を認め合う場とするとともに、自分のよさを客観的に認識できるようにしている。

自分が思い描いた分野で活躍する卒業生たち

「28project」の集大成として、28歳時に、同級生と当時の担任が集う「ホームカミングデー」が開かれる。起業して自分の会社を持った卒業生、海外でボランティア活動をする卒業生、子連れで参加する卒業生など、自分の人生をしっかり歩む卒業生の姿に、教師は「28project」の意義を実感する。

「社会とのかかわりを大切にし、自分のよさを他者のために役立てようとする卒業生が多いと感じています」（神谷副教頭）

「企業コラボレーション総合学習」など、連携企業として勤務先との間を取り持つ卒業生も出てきた。

「在籍時の満足度が高く、在校生の役に立ちたいと協力を申し出る卒業生が多いことは、本校の強みです。『28project』の意義を勤務先に説明してくれるなど、よい循環ができ始めています」（斉藤先生）

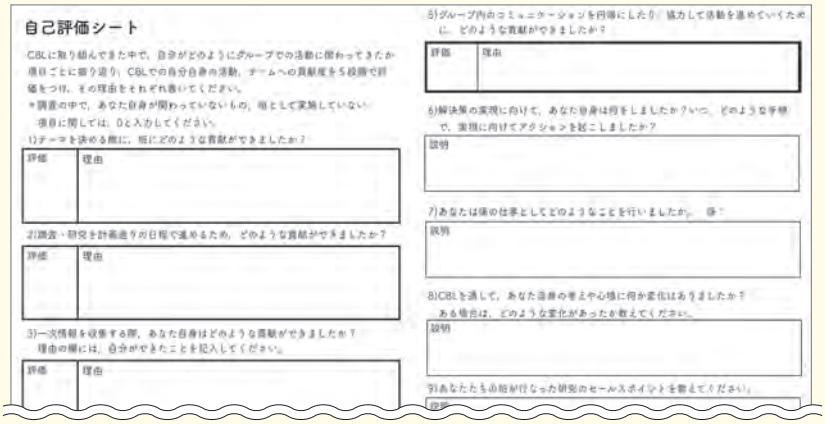
卒業後の進学先は、特定の学部・学科に偏っていないのが特徴だ。6年次には、大半の生徒が明確な希望進路の下に志望校選択をしている。

「例えば、企業経営を学びたいからといって、経済・経営・商学科をひとくくりに考えず、各学科の内容をしっかり調べてから志望校を決めています。多くの生徒が第1志望にこだわり、大学入試に挑戦しています」

今後の課題は、生徒個々の力をより高めることだ。現在の探究学習を1～3年次で行い、CBLで個人のプロジェクトを加えることなどを検討していると、神谷副教頭は語る。

「チームで自立した活動をする生徒を見ていると、個人の突出した力を育むことも必要だと考えています。生徒が、自分のあり方や生き方によりつながる課題に取り組めるよう、プログラムを改編する予定です」

図2 CBLの「自己評価シート」、生徒の記述内容


自己評価シート

CBLに取り組んできた中で、自分がどのようにグループでの活動に関わってきたか。項目ごとに振り返り、CBLでの自分自身の活動、チームへの貢献度を5段階で評価をつけ、その理由をそれぞれ書いてください。

＊調査の中で、あなた自身が関わっていないもの、役割として実施していない項目に関しては、0と入力してください。

1)テーマを決める際に、何にどのような貢献ができましたか？

評価	理由

2)調査・研究を計画通りの日程で進めるため、どのような貢献ができましたか？

評価	理由

3)一次情報を収集する際、あなた自身はどのような貢献ができましたか？理由の欄には、自分ができたことを記入してください。

評価	理由

5)グループ内のコミュニケーションを円滑にしたり、協力して活動を進めていくために、どのような貢献ができましたか？

評価	理由

6)解決策の実現に向けて、あなた自身は何をしましたか？いつ、どのような手段で、実現に向けてアクションを起こしましたか？

説明

7)あなたは後の仕事としてどのようなことを行いましたか。 例：

説明

8)CBLを通して、あなた自身の考えや心情に何か変化はありましたか？ある場合は、どのような変化があったか教えてください。

説明

9)あなたたちの始が行なった研究のセールスポイントを教えてください。

生徒の振り返り（抜粋）

◎自ら行動して外部から情報を得ることや、解決策をすぐ考えるのではなく、課題についてよく知ることが重要だと気がついた。結果ではなく、プロセスを重視するようになった。

◎今回初めてリーダーを務めたことは、私にとって大きな挑戦だった。よいリーダーとは、他者に高圧的で、それでもよい仕事をすることで、メンバーについてこさせる人だと思っていた。しかし、自分がリーダーを経験して、よいリーダーとは、メンバーが楽しく役割を果たせるようにすることができる人だと分かった。

◎話し合いがうまくいかない時には、一度話を整理し、「自分たちが今、一番優先して行うべきこと」を再確認した。何も考えが浮かばなければ、雑談などをしたり、飲み物を飲んだりして、頭が柔らかくなるようにした。メンバー間で意見が食い違った時は、自分がまず相手の主張を最後まで聴き、それを受け入れてから、自分の意見を言うようにした。

＊学校資料を基に編集部で作成。

卒業生の声

自分の土台を築いた中高6年間

63期生 生徒会長
(株)ベネッセコーポレーション勤務 **小川 舞**さん

振り返ると、中高6年間の様々な経験が、今の私の土台を築いたのだと思います。

中学1年次からチームでの活動がたくさんあり、メンバーは活動ごとに異なりました。いろいろな人と目標に向けて必要な議論をする中で、個の違いを肯定的に捉えられるようになり、先入観なく物事を見る姿勢が身につきました。違いを認め、受け入れる寛容さは、生徒にも先生にもありました。私が入学時には考えてもいなかった生徒会長に挑戦できたのは、何があっても仲間や先生が応援してくれるという安心感があったからだと思います。

企業へのプレゼンテーションでは、一生懸命考えた提案でも通らないこともあり、挫折も味わいました。ただ、何度も経験するうちに堂々と発表できるようになり、社会人になった今、100人以上を前にした生徒講演や研究会でも、自分の言葉で伝えることができていると感じます。

2020年は、中学入学時から先生方に「1つのゴール」と言われた28歳になります。在籍時に思い描いた自分になれているのか。ホームカミングデーで同級生に会い、確かめたいと思います。